



バトンを持つ私たちはどこに行く

19世紀末から1945年まで、実に4度の戦争を日本は行った。なぜ、こんなにも多大な犠牲を伴う悲惨な戦争を選択したのか？その理由や正当化された論理を探っていく。

著者は東大文学部教授であり、日本近現代史が専門の歴史学者である。著者は2007年に中高生17人へ5日間の講義を行った。講義と聞くと、先生が一方的に話し学生はおとなしく聞くイメージだが、この講義はそういう形式ではない。実際に近年の研究成果や史料が提示され、それを読み解きつつ、もし自分ならそのときどうするか？先生と学生の間で意見が交わされていく。その特別講義をまとめたものだ。歴史の本としては異例の28万部以上のベストセラーとなっており、2010年には小林秀雄賞を受賞した。

私は著者の次の言葉が心に残った。「現在

の社会状況の判断や未来を予想するとき、人は無意識に過去との対比を行っている。そこで思い起こされる過去の事例がどれだけ豊かに蓄積できているかが重要だ。そのことから日本で起きたことを多くの人に正確に知ってもらう必要がある。」私たちは、未来を確実にには見通せない。未来において過去を振り返ったときにあのときの選択は正しかったと言える判断を現在ですること。これは非常に難しいが、大事なことだと私も強く共感した。過去と全く同じことは起きないが、良い選択をするためのヒントが歴史から得られる。歴史を学ぶ意義はそこにあるだろう。そのヒントが知りたい、考えたい全ての人にお勧めだ。

また、「歴史って、過去の出来事を暗記する科目でしょ？何が面白いの？」という人にも読んでほしい。中高生へ語る形式のため比較的分かりやすいが、中高生は名門校の歴史研究部が中心のメンバーのため一般的な中高

生像とは離れている。したがって、明治～現代の歴史を知っている方が読みやすい。自信がない人は簡単に日本史を参照しつつ読んでいくと良いだろう。そうすると、歴史は暗記科目だという思い込みが覆される。そして、背景や理由を考察することである出来事が妥当なものか、その因果関係を探る歴史の面白さを十分に味わえること間違いなしだ。

私たちは先人からのバトンを受け継ぎ、広い視野と多角的な視点を持って生きていこう。

恐れすぎることなく、勇気を持って。そして、

どんなときもその選択が絶対に正しいと思いつままないこと。間違えたときには、素直に認めること。決して忘れないように…